

## 憑霊信仰の歴史と民俗

—平安朝の病因論と治病儀法を中心として—

酒向 伸行

御影史学研究会代表理事

日時：2014年10月15日（水） 17：30～19：00

会場：神奈川大学横浜キャンパス9号館11室（日本常民文化研究所）

---

### 平安朝の病因論と憑霊信仰

---

#### 1. 「憑入」と「憑着」

民俗宗教の世界において、人々は神仏や霊的存在と、さまざまな手段を用いて交流してきた。なかでも、「憑霊」という現象がそこでは重要な位置を占めていることは周知の事実である。憑霊とはシャーマニズム研究でいう「ポゼッション」の訳語として用いられるようになった学術用語であり、民俗社会においては一般的に「つ（憑）く」とか「おる」などという語で表現される現象である。筆者は、憑霊信仰の分析概念として「憑入」・「憑着」という二つの概念を設定し憑霊信仰について考えてきた。「憑入」とは「霊的存在が直接人間の内部に入りこむ」というタイプの憑霊現象をいい、「憑着」とは「人間の外部に存在する霊的存在が人間になんらかの影響を及ぼす」というタイプの憑霊現象をいう。

憑入は典型的な憑霊状態を意味しており、わが国では巫覡に神がのりうつる「神がかり」などの状態として認識されてきたものである。ただ、この憑入にも大きく二つの類型がみられる。一つはイタコに代表される口寄せ巫女の巫儀に典型的にみられるような霊的職能者自身に霊的存在が憑入するというタイプであり、いま一つは山伏が修する憑祈禱に典型的にみられる依座（よいまし）などと称される第三者に霊的存在を憑入させるというタイプである。憑入に対して、憑着は憑霊概念をより広義な概念としてとらえるべく用いる概念である。憑着の実例としては死霊などの悪しき霊的存在が人に憑くことにより病などの心身の異常が生じるという信仰をあげることができる。本稿は、平安朝における病因論と憑霊信仰との関わりを、この憑入・憑着という視点から明らかにすることを目的としている。

#### 2. 「もののけ」の憑着と病

##### ①「もののけ」と病者

藤原氏を中心とする平安貴族社会において、10世紀中頃から、特定の霊が、特定の個人、あるいは家筋にとりつき悩ませるという信仰が登場してくる。その霊は「もののけ」と称され、その正体の多くは死者の霊とされた。このような「もののけ」としては、藤原元方の霊がもっともよく知られている。『栄華物語』によると、元方の霊は東宮憲平親王（後の冷泉天皇）をはじめ、その父村上天皇・母安子・冷泉院女御超子らにとりつき悩ましている。このように元方の霊が「もののけ」となったと信じられたことには次のような背景があった。元方の娘は村上天皇の女御となり第一皇

子を産んだのであるが、やがて藤原北家の師輔の娘安子が中宮となり、第二皇子憲平親王を産み、これが立太子された。このことを悲しんだ元方と娘は絶望のうちにこの世を去り、元方の死後、その霊は「もののけ」となり、冷泉天皇をはじめ、冷泉天皇の子である三条天皇らにも憑着し病や死をもたらしたと信じられたのである。

『栄華物語』巻第1の応和4年(964)安子出産時の記述によれば、「御ものゝけどもいと数多かるにも、かの元方大納言の霊いみじくおどろおどろしく、いみじきはひにて」あらわれ安子を死に至らしめている。この安子出産時の場面に次のようにある。

東宮も、御物のけのこの宮に参りたれば、例の御心地におはしませば、いといみじう悲しきことに惑はせ給もあはれに、見奉る人皆涙とどめがたし。

つまり、東宮にとり憑き、彼を長年苦しめ続けていた元方の霊が、安子出産時には安子の方へ行ったので、その間、東宮は平常の心身状態にもどっていたというのである。このように、「もののけ」は人間界を自在に移動し、「もののけ」が憑着している人物から離れることにより、その人物は病悩から解放されると認識されていた。

逆に「もののけ」が人間界を自在に移動すると信じられていたがゆえに、人々は「もののけ」に憑着された人物には近付かないように努力した。たとえば、『栄華物語』巻第1には、「東宮の女御も、宮の御もののけの恐しければ、里がちにぞおはしましける」とある。

ところで、三条天皇が眼病に苦しんだことはよく知られている。これは、「主上御目、冷泉院御邪氣所為云」と、冷泉院の「邪氣」の仕業ともされた(『小右記』長和4年〈1015〉5月4日条)。「邪氣」とは、「もののけ」という和語に対する漢語的表現である。また、「律師心誉加持女房、賀静元方等靈露云」ともあることから、賀静や先述した元方の霊がとりついたためともされた(同5月7日条)。

ここで注目したいのは、先の5月4日条の記事の後に「移人之間御目明云々」とあることである。「移人」とは病者に憑着した「もののけ」を依座に駆り移す(憑入させる)、いわゆる憑祈禱を意味している。憑祈禱を修することにより三条天皇の目が一旦回復したとされているのである。藤原道長病悩の記事にも「重悩苦給声太高如叫、僧等相集加持、靈氣移人被平復」とあり(『小右記』寛仁2年〈1018〉閏4月24日条)、このような記事は、当時の日記類に頻出する。先述したように「もののけ」が憑着していた当人から依座という別の人間へと移動し離れることにより病悩からいったんは解放されると認識されていたのである。

このように、験者によって修された憑祈禱の目的は、病者に憑着した「もののけ」をまず依座に憑入させ、とにかく病者を平常の心身状態にもどすところにあつたといえる。

## ②「もの」と「け」

「もののけ」には一般的に、「物怪」、あるいは「怪」字の俗字「恠」を用いる「物恠」の字が当てられている。

しかし、『左経記』寛仁2年(1018)閏4月17日条には、「早旦参法性寺、御悩頗宣、御悩物気云々」とあり、万寿3年(1026)閏5月9日条には、「御悩猶不快、御物気、并聖天、貴生弥明神顕出」とある。このように『左経記』は「もののけ」を「物気」と記述しているのである。そして、『今昔物語集』も、「もののけ」を病因として記述する場合はすべて「物ノ気」と記述している。この点に注目し、以下、「もののけ」という語の語源について考えていくことにする。

まず「もの(物)」であるが、古代よりその正体が明確ではない霊的存在は、その名を直接呼ぶ

ことをはばかり意識もあってか、ただ「もの」と称されてきた。たとえば、『今昔』巻27-15では、ある女が家主の老女が鬼であることに気づき逃げる場面で「此レハ鬼ニコソ有ケレ。我レハ必ず被食ナム」とあり、次に「然ル旧キ所ニハ必ず物ノ住ニゾ有ケル。(略)定メテ鬼ナドニテコソハ有ケメ。」とある。このように、『今昔』では「鬼」を「物」の顕現化した姿として記述する事例が多い。

さらに時代を遡ると、9世紀初頭に成立した『日本霊異記』には、「鬼(もの)に託(くる)ふ」という注目すべき用例をみることができる。たとえば、中巻-3では、母を殺そうとする息子に対し、母は、「若し汝鬼に託へるや」と言い、その子がまさに母を殺そうとし、その罪の報いによって大地に飲み込まれようとする時、母は天にむかって、「吾が子は物に託ひて事を為す。<sup>まこと</sup><sup>うつ</sup>実の現し心に非ず。願はくは罪を免し給へ」と叫んでいる。このように「鬼に託ふ」とはその正体が不明な霊的存在の憑依によってもたらされる精神的な異常状態を意味している。そして、ここで「鬼」字と「物」字とが同一に用いられていることから、「鬼」字は「もの」という和語にあてられていることがわかる。

以上のようにその実体が不明である霊的存在が「もの」と総称されていたのであり、しかも、『霊異記』の時代には、「もの」は人間に憑依し、精神の異常をもたらすというように、すでに人間界にマイナスの力を及ぼす存在としての属性を付与されていたといえる。

次に「気(け)」について考えたい。『霊異記』中巻-24は次のような話である。

檜磐嶋という男が越前敦賀で商いをして帰る途中、突然病となる。そして、「閻羅王の闕の、檜磐嶋を召しに往く使」である三人の鬼に出会う。鬼の乞いにしがい干飯を与えると、鬼は「汝、我が<sup>け</sup>氣に病まむが故に、依り近づか<sup>ず</sup>不あれ。但恐るること<sup>な</sup>莫かれ」と語った。そして、家で牛の肉を饗応すると、鬼は磐嶋を召すことを免した。

この鬼は「冥使」としての性格と、人に病をもたらす「疫鬼」としての性格とを共有する存在である。ここで注目されるのは鬼が磐嶋に、「汝、我が<sup>け</sup>氣に病まむが故に、依り近づか<sup>ず</sup>不あれ」と語っていることである。つまり、磐嶋の病はこの鬼の「<sup>け</sup>氣」によるものであり、さらに鬼に近づくことにより病は重くなるというのである。このように人間が鬼に近づくだけで病におちるという認識はその後継承された。たとえば、『今昔』巻14-42によれば、藤原常行は年少の頃、路上で百鬼夜行に出会ったが尊勝陀羅尼の力によって難を免れた。しかしそれから三、四日程は高熱が続いたという。また、巻20-27は長屋王の変に取材した説話であるが、長屋王の骨が流された土佐国で百姓が多く死んだが、これを「彼ノ長屋ノ悪心ノ氣ニ依ニ、此国ノ百姓多ク可死シ」としている。本話の典拠である『霊異記』中巻-1でも、「親王の氣に依りて、国の内の百姓皆死に亡す可し」とある。

以上みてきたように、平安朝の人々は「もの」と総称される霊的存在の「<sup>け</sup>氣」に触れ、その影響力によって病となり、時には死に至らしめられると認識していたといえる。すると「もの<sup>の</sup>け」という語は、本来、「人間の近くに存在する霊的存在の悪しき影響力」を意味する語であったといえよう。それが10世紀中葉以降の貴族社会において、固有の概念を有し、特定の人物、あるいは家筋に憑着し悩ませる存在を指す語へと変化していったのである。しかし、「もの<sup>の</sup>け」の本来の概念、すなわち霊的存在の人間に及ぼす病などの悪しき影響力という概念はそのまま「もの<sup>の</sup>け」の属性として継承されていたといえる。

### 3. 「もの」の憑着

#### ①「もののけ」の憑着

以上論じてきたように、古代においては、「もの」と総称される霊的存在が人間に憑着し、その「け(気)」によって病がもたらされるとする病因論が存在していた。それでは、「もの」は具体的にどのように人間に憑着していると認識されていたのであろうか。最後に、この「もの」がそれぞれに独自の属性を付与され、分化・個別化していくことによって成立していった「もののけ」・「疫鬼」・「天狗」などの霊的存在それぞれの憑着イメージをその視覚的イメージを中心にみていくことにする。

まず「もののけ」であるが、先述した元方の霊をその正体とする「もののけ」の事例でも明らかのように、「もののけ」は人間界を自在に移動し「もののけ」が接近し憑着することにより病はもたらされ、逆に「もののけ」が憑着している病者から離れることにより、その病者は病悩から解放されると認識されていた。

この「もののけ」の憑着の具体的な視覚的イメージとして注目されるのが、『源氏物語』葵巻で葵の上が「もののけ」に苦しめられている場面における次の描写である。

物の怪、生<sup>け</sup>霊<sup>いきすだま</sup>などいふもの、多く出で来て、さまざまの名のりする中に、人に更に移らず、ただみづからの御身に、つと添ひたるさまにて、殊におどろおどろしう、わづらはし聞ゆる事もなければ、また、片時離るる折もなきもの、一つあり。

葵の上のために憑祈禱が修されているのであるが、依座にも移らず、彼女の身体にぴったりとくっついて離れる様子もない「もののけ」(その正体は六条御息所の生霊)が葵の上に憑着している様子がこのように描かれているのである。以上のように「もののけ」は病者のすぐ近くに存在して悩ませたり、その身体に密着して苦しめていると認識されていたといえる。

#### ②疫鬼の憑着

先述した『靈異記』中巻-24の檜磐嶋に憑着し病をもたらした鬼は疫鬼の性格を強く有していたが、さらに具体的な疫鬼の活動の様を三善清行の『善家秘記』にみることができる。貞観4年(862)清行の父氏吉に疫鬼が憑着し疫病をもたらしたが、氏神がこれを追い払い、最後には疫鬼は「阿波鳴渡」に去り、病は平癒したという。この疫鬼の姿は裸鬼で槌(=槌)を持つと描写されている。また、寛平5年(893)、清行が備中介であった時にも、疫病が流行した。その際にも疫鬼が児童の首を手にする槌で打つとこの児童は発熱し頭痛が激しくなったという。そしてこの疫鬼は祭りを受けて賀夜郡大領の家に移り、児童の病は平癒し、逆に賀夜郡大領の家で疫病が発生したという。ここに描かれる疫鬼も裸鬼で槌を手を持ち、これで打つことによって病をもたらす別の地へと去ることによって病は癒えている。やはり霊的存在が人間に密着することによって病はもたらされ、離れることによって病は癒えるのである。

なお、ここでは疫鬼が槌を手に行っていることに注目したい。鬼が槌で打つことによって病や死をもたらすとするイメージは古代中国の伝承を背景に成立したと考えられる。たとえば、後漢の王充が著わした『論衡』22訂鬼第65で、王充は鬼が病者を槌などで打つから身体が痛むと人々は言っていると記している。また、晋代、4世紀中ごろに干宝によって著された『搜神記』巻16に登場する鬼も鉄の鑿を人間の頭に槌(=槌)で打ち込むことによって死に至らしめている。

このような鬼が槌で人間を打つことによって病や時には死をもたらすという疫鬼の憑着イメージは、その後も継承されていった。たとえば、14世紀初頭に成立した『春日権現験記絵』巻8第2



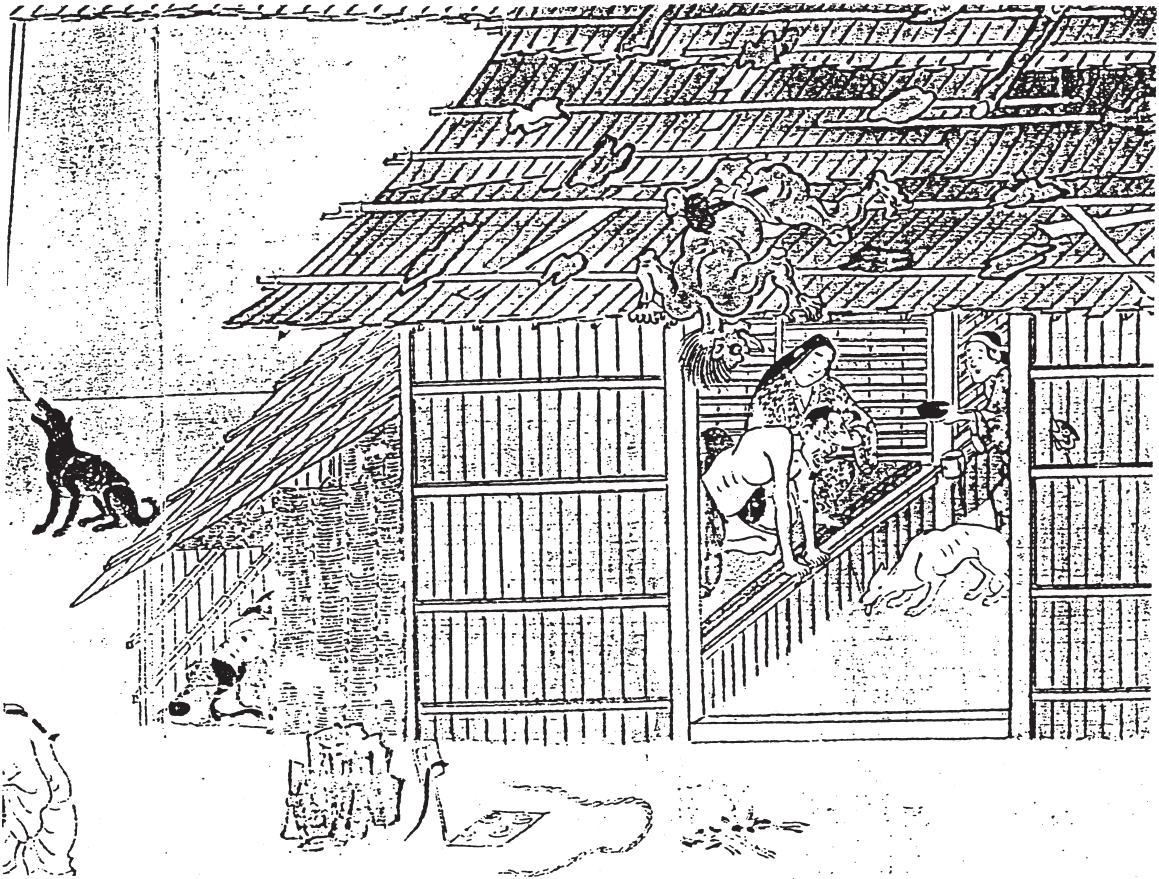


図1 『春日権現験記』巻8-2

段に登場する疫鬼の凶像に注目したい（図1参照）。疫病を病む病者の家の屋根の上からのぞきこんでいる異形の物が疫病をもたらした病因である疫鬼であり、その腰には槌が差されている。この槌で打たれることにより人間は発病すると認識されていたと考えられる。

以上のように、この時代においては人間が鬼に近づく、あるいは鬼が人間に近付き憑着することによって病がもたらされると認識されており、憑着の具体的なイメージは鬼が槌で打つことにより病者を苦しめ、時には死をもたらすというものであった。

### ③天狗の憑着

先述した三条天皇の眼病について、『大鏡』三条院条によれば、その病因として「もののけ」や「天狗」があげられている。平安時代には、天狗の正体は僧の「もののけ」とされることが多かった。これは『宝物集』で、後に愛宕山の天狗としてよく知られるようになった真済が「もののけ」となったとされていることからよく理解できる。この時代には、天狗は鳥の姿で表象されることが多かったが、『大鏡』によれば桓算供奉という僧の「もののけ」は左右の羽で三条院の目をおおっていると、鳥の姿で描かれている。この天狗は三条院の首に乗っており、三条院に憑着していることになる。そして、『続本朝往生伝』6の遍照伝に次のような記事を見ることができる。天狗が人に憑入し、次のように語ったという。当時北山に棲んでいた自分は鳶の姿に変じて右大臣の家の寝殿に入り、足でその胸を踏んだ。すると、にわか病ということであつた家中が大騒ぎになった。ここでも天狗は鳶という鳥の姿をとっており、足で踏むことにより病をもたらしていると認識されていたのである。

さらに、『拾遺往生伝』巻上-15長慶伝は次のような話である。中原忠長の娘が邪気を患った。

邪気とは先述したように「もののけ」の漢語的表現であることから、娘は「もののけ」に憑着され病となったことを意味している。そこで有験の僧によって加持が修され、依座に「もののけ」が憑入し天狗というその正体を顕すこととなった。さらに、依座に憑入した天狗は「吾が気に触るるに、後の体不予なり」と述べている。つまり、天狗の「気」によって、言い換えれば天狗が憑着することにより病となったのだという病因論を明確に表現しているのである。

#### 注

本稿で用いた「憑入」・「憑着」という概念については、酒向伸行「疫神信仰の成立—一八、九世紀における霊的世界観—」（鳥越憲三郎博士古稀記念会編『村構造と他界観』雄山閣、1986年、所収）において最初に定義し、その後、考察を進めてきた。一方、佐々木宏幹氏も「憑入・憑着・憑感」（『文化人類学』、アカデミア出版会、1985年、所収。後に『聖と呪力』〈青弓社、1989年〉に収録された）において、同様に「憑入」・「憑着」という用語を用いて憑霊現象を分析している。しかし、佐々木氏の「憑入」・「憑着」の概念と本稿で用いている筆者の概念との間には異同があるので注意されたい。なお、詳細については酒向伸行『憑霊信仰の歴史と民俗』（岩田書院、2013年）を参照されたい。

#### 付記

2014年10月15日の第97回神奈川大学日本常民文化研究所研究会において、「憑霊信仰の歴史と民俗—平安朝の病因論と治病儀法を中心として—」と題して、拙著『憑霊信仰の歴史と民俗』の梗概を報告した。本稿はその内容を平安朝における病因論を中心に要約し、改題したものである。